
溜息ツキ子の遠吠え

アメメン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

溜息ツキ子の遠吠え

【Nコード】

N3638G

【作者名】

アメメン

【あらすじ】

溜息ツキ子の続編。実はあの後、こうなっただんですよ。後悔は先に立たず・・・女として生きるのって案外難しいかも！？

<1>その後の修羅場!?

携帯が鳴った。

それが真紀子からの電話だと分かった瞬間、アタシの心臓が凍り付く。

出るつもりじゃないのに、指がいつものクセで動いてしまう・・・ああ・・・

「モシモシ、ツキちゃん? ねえ、聞こえてるんでしょ? モシモシ」
しまったあ!! こういうのを後の祭りって言うのよね。

真紀子は普段と変わらないような話し方をしている。

でも、その声は確実に気持ちを押し殺しているように聞こえた。

間違いなく、私が隠しておきたかったアノ秘密を知ってしまったんだ。

「ああ・・・真紀子・・・うん・・・聞こえてるけど・・・」

これから巻き起こる修羅場を思うと、アタシの頭の中は真っ白になった。

そう、アタシは真紀子の5歳年下のイケメン旦那と<危ない関係>にある訳だ。

弟から「ヨースケに女が出来てさ、問いつめた真紀子さんにヨースケが手を挙げたらしい」という電話を貰った時に、こういう時がいつか来るとは覚悟していた。

身から出たサビ、因果応報・・・そんな言葉が頭の中をグルグルと回っている。

取りあえず出来る限り小さく縮こまって、落ちてくるであろう<妻の怒り>という名の爆撃に備えた。

真紀子の旦那のヨースケというのは、私の可愛い弟のテルキの高校の同級生。2人は親友同士だった。ヨースケは、元ビジュアル系のバンドを組んでいて、そのボーカルだった。

30を超えた今でも、瞳の中で星が瞬いているような王子様系キャラの洒落男だ。

長くてしなやかな手足にウェーブのかかった髪、長い睫毛、濡れたような唇、ちよつとハスキーな声。

影のある憂いを秘めた眼差しは、今でも女心をくすぐり続けている。不安定なバンド活動の方は結婚を機に止めたが、女性活動の方はバリバリの現役というくちヨイ悪王子>なのだ。

見つめられたら、どんな女でもイチコロ間違いなし！！だからといって、アタシが手を出してもイイという言い訳は立たないんだけれどもね。

でもさあ・・・そんなこんなで、友達や家族には完璧内緒にしてきたけれども、ヨースケとは色んな意味でアタシの方が真紀子よりも付き合いが長いよ。

「あのねえツキちゃん、話しておきたい事があるんだけど」
来た来た・・・ヤバイよー！！

「な・・・何・・・かなあ？」

今回ばかりはごまかせないかも・・・どうしようー！？

バレたらさあ・・・美保も、千里も、香織も、友達ではいてくれないだろうなあ・・・テルキも、それに父さんや母さんだって・・・皆の信頼を裏切っちゃったんだもんね・・・怒られるだろうなあ。

うつん、怒られるだけじゃ済まないよね・・・絶交？絶縁？勘当？・・・ああ、そうなつたらどうしょー！？

「ヨースケのヤツ・・・やっぱり浮気してたのよー！！」
全てアタシが悪いんだけど、でもイヤだよー！！

「あのゝゝその事なんだけどもねゝゝ」

「あらゝ？ツキちゃん、何か知ってるの？」

自分の時いた種とはいえヤバ過ぎ！！

「ん？ゝゝあゝゝいやゝゝそのねゝゝ」

「相手のキヤバ嬢の事ゝゝ何か知ってるの！？」

「キヤ、キヤバ嬢？ゝゝあぶぶゝゝしゝ知らない知らないわよ」

ちよつと待つてよ！ゝゝ相手のキヤバ嬢つてゝゝ誰よ？ゝゝどういう事？

「その子さあ幾つだと思う？ゝゝまだ19なんだからあゝゝもう勘弁して欲しいと思わない？」

「えゝゝええゝ？」

だって、ヨースケの浮気相手つて、アタシの筈なんですけどあゝ！？

「ね？ビックリしちゃうでしょう？」

「うゝゝうん」

ヤダよ、本当にビックリだわよゝゝだけど何で？ゝゝどういう事？ゝゝどうなっちゃっているの？

「本当の事を言うとなゝゝアタシ、ツキちゃんには申し訳なかったんだけど、疑っていたのよねゝゝ」

「え？ゝゝ何を？」

「だってゝゝツキちゃんとヨースケゝゝ昔、色々あつたみたいじゃない？ゝゝううん、隠さなくてもいいのよ。アタシもうすうす気付いていたんだからあゝ」

アタツ！！頭が混乱して来た？！

「何よ、それゝゝ」

うすうす気付いていたって何をよ？

「それについては、昨夜、ヨースケが全部話してくれたからゝゝ」

「へゝゝへえゝゝそゝゝそうなんだあゝゝ」

ヨースケのヤツゝゝどこまで何を話たのよあ？！ゝゝやだよゝゝピンチ！！

「高校生ぐらいの男の子つてね、時々、手近な所に居る年上の女性

に憧れを抱いちやうものなんですよ。

恋とか愛とかの全然手前の状態の淡い感情。誰でも一度は経験するらしいのよね。ヨースケがツキちゃんに抱いていた感情は、その中の一つだったんですよ。そうね、喩えて言うとおシカ（麻疹）みたいなモノかなあ？子供時代の初恋の一部みたいなモノらしいんだけどね。そう言われるとさあ、ああ、そうか。って理解できたの」

「ハ・シ・カ？」

そうかい、アタシはハシカかよ？・手近な所に居る年上の女性だつてえ？・その中の一つだつてえ？・ヨースケのヤツめ！！

「アタシね・前からヨースケのツキちゃんを見る目つきが気になつていたのよね。でも、誰でもかかるハシカみたいな初恋の人だつたっていう訳よ・アタシも経験あるしね・アタシの場合は家庭教師の先生だったんだけどね・でも、男の方が成長が遅いから、女の子みたいに熱くないんだってさあ」

そんな事が言える立場じゃ無いってわかってはいるけど、なんか、ちよつとム力つくんですよ！！

「ふん・ヨースケが手を挙げたってテルキから聞いたんだけど・大丈夫なの？」

ちよつと意地悪な気持ちを抑えられなくなって聞いてみた。

「ああ、あれは弾みで当たっちゃっただけよ。全然、大した事じゃなかったんだけどね。ヨースケのヤツがプイツと出て行ったきり戻つて来なかったものだから、つい腹が立つちゃってね・それで、テルキ君にちよつと大袈裟にぶちまけちゃったのよ。心配掛けてゴメン」

なんだか、ちよつと肩すかしを食らった感じ！！

「今回の事はアタシも悪かったのよね。二人目がお腹にいるものだから気が立っていたのよ」

「そうなんだあ・・」

鳩尾の辺りがスー&チクチクしてきた。

「んふふ・・ヨースケってばね、本当は寂しかったんですってえ・・アタシがツワリとかでヨースケをかまってあげなかったから・・それでね、昨夜、ゴメンって土下座して謝ってくれたのお」

「ど・・土下座って?・・ヨースケが?」

「そうなのよ、信じられないでしょう?・・それもね、わざわざ玄関ドアの外まで出て、マンションの外廊下におでこをこすりつけたのよ」

驚き桃の木山椒の木・・とは、まさしくこういう事を言うんだわさ。
「ウツソ・・マジ!??」

世の中的にはクソオヤジが土下座しただけでも効果を発揮する場合があると言われてはいるけど、ヨースケ様の土下座は特別だから効果100倍という訳。

「ヨースケってばねえ、僕は君や子供達と幸せになりたいと思ってる!・・なんて言ってくれたのお」

ハタと我に返って冷静になって分析してみると、真紀子の声には<怒り>が微塵も感じられない事に気が付いた。

むしろ、喜んでいるような・・嬉しがっているような・・もしかしてのろけているのかしらん?

それに・・気のせいだろうか・・アタシに対しての優越感のような香が言葉の端々に漂っている気がするんですけど・・これって負けイヌ女のヒガミかな?

身勝手な言い分である事は重々承知しているけれど、アタシはヨースケが他のパツパラ女達と遊び回って家庭を壊してしまわない為に<イケナイ関係>を続けて来たようなトコロもある訳なんだから・・。

アタシだったら真紀子の家庭を壊したりなんかしないもの・・何てったって真紀子はアタシの親友なんだから絶対に泣かせたりしない・

・本気でそう思っていたんだから・・・。

それに、ヨースケはアタシの事を特別の存在だって・・・そう言ってくれていたもん。

なのに19のキャバ嬢が浮気相手に、アタシは昔々の手近な所に居た年上の女なの？・・・それも、誰でも一度はかかる麻疹みたいな初恋の人だつてえ？・・・どういう事よ？

悪いのはくアタシ>という事はよく分かってるけど・・・怒れた義理じゃないけれど・・・アタシは過去の遺物や化石じゃありませんからねえー！！

腹立つなあ、もう・・・冗談じゃないわよおー！！

だけど「僕は君や子供達と幸せになりたい！！」というフレーズが、胸に突き刺ささったまま抜けないのさ！！

別にヨースケとの結婚を夢見ていた訳じゃないけれど、痛い！！痛くて・・・痛くて、痛くて、苦しくて、辛くて・・・涙が込み上げてきちゃう。

「・・・近いうちに夕飯でも食べに来ない？」

真紀子の弾んだ声が頭の中でガンガン鳴り響く。

「ツキちゃん、聞いてるう？」

「・・・」

今のアタシは、うなずく事も出来ないでいる。

<2> 節穴じゃないんだから・・・って・・・！？

今回は、アタシも思い切って色々と言ってやったわよ！！

グーの音も出ないって、こういう事を言うのよね。

でも、ちよつと仲の良いところを見せつけすぎちゃったかなあ？ツキちゃん驚いていたみたいだけど、このくらいは良いわよね？

だつてさあ、ヨースケはく私の旦那>なんだもの・・・ツキちゃんの弟じゃないんだよお。

いくらヨースケがテルキの親友だからってさあ、ツキちゃんとヨースケは仲が良過ぎるんだよお!!

高校の頃から知っているからって、保護者気取りの「私、ヨースケの事は何でも知っているのよ」的なツキちゃんの態度には前からイラついていたのよね。

結婚前にヨースケとツキちゃん何かあったのかも知れないけど、今は、私がヨースケの妻なんですから!!

本当はさあ、前からちよつと気になっていたんだけどね・・・どういう関係だったのかなあって。

でも、今回はヨースケがちゃんと説明してくれたから少し安心できた。

でも、先の事は分からないじゃない?

この際、ついできて言ったらアレだけど、釘を刺しておいた方がイイかなあって思ったのよ。

ホラ、転ばぬ先の杖って言うでしょう?・・・あの二人・・・今までは何でもなくてもさあ・・・放っておいたら先々どうなっちゃうかわからないもんね。

ヨースケが何とも思っていないけどもツキちゃんが一方的に・・・みたいな事ってあるもん。

ツキちゃん、だいぶ動揺していたみたいだったから・・・私の目も、まんざら節穴じゃないって事よ!!

ホントはさあ、この間の中学の同窓会の日「ツキちゃんとヨースケが2人きりで飲みに来てるんだけど、真希ちゃんは今来なくてもイイの?」って、マスターから電話があったの。

千里やサトケン達と盛り上がって「今夜はトコトン飲もうっぜい!」って、二次会のお店まで行ったトコロだったんだけどね。

ほら、あのマスター・・・ツキちゃんに気があるものだからイケメンのヨースケと2人きりにしておくのが心配だったのよ。

でもさあ、あの時はアタシ、チョットだけドキッとしたんだあ。

だって、あの日はヨースケが仕事で遅くなるって言っていたから、真由をわざわざ実家に預けていたんだもん。

出掛けにヨースケが言っていた「帰りが遅くなるようだったら、泊まって来てもイイよ」という言葉がツキちゃんと結びついちゃって頭の中が真っ白になっちゃった訳。

千里とサトケンを振り払って私が店に駆けつけた時、二人とも少し驚いた感じだった。

だけど、何かさあ・・・女の・・・妻の直感?!・・・怪しい感じがしたんだよねえ。

ヨースケとツキちゃんが言うには、私の誕生日のビックリパーティーの打ち合わせをしていたって話だったんだけど、何かスツキリしなくてね。

特にヨースケの態度が怪しくてさあ。

私の顔をみるなり、そそくさと真由を迎えに私の実家に行っちゃったんだもん。

それまで、一人で私の実家に行った事なんて無かったんだよあ・・・おかしいでしょう？

ツキちゃんを問いつめてやろうと思ったんだけど、ヨースケが居なくなつたのをイイ事にマスターが割り込んで来ちゃってさあ・・・。そっかあ・・・あの時に私が消えたから、千里とサトケンは結婚する事になつたのよねえ?・・・世の中って何がどうなるか分からないよなあ。

まあ、そんなこんなで、モヤモヤした気持ちを抱えて悶々としている内に季節は過ぎてゆき、何故か私は再度妊娠しちゃったって訳。

でも、このところヨースケの帰りが遅くなつた事も気になっていたから、真由の入園式の前にモヤモヤを全部スッキリさせておこうと思つて探偵を雇ってみた訳。

元刑事だとは言っていたけど、なんか冴えない感じの年配のオヤジ

だったから、あんまり期待はしていなかったんだけどね。

ううん・・気持ちの何処かでは、ヨースケが浮気していない事を望んでいたのかもしれない。

ああいうヤツだからさあ、叩けば埃の一つや二つ・・そりゃ覚悟はしていたけど。

それが蓋を開けてみれば、相手はツキちゃんかと思いきや・・19歳のキャバ嬢ときたもんだあ！！

毎晩帰りが遅かった訳だよね。

休みの日には一緒に買い物に行ってくれたりして家庭サービスをしてくれていたから、油断していたアタシも悪かったんだけど・・。出来るだけツキちゃんから遠ざかっていれば・・なんて、考えが甘かったなあ。

腹は立つけど、ヨースケは「軽い遊びだった」って言っているし・・。此処は我慢のしどころだよな。

ヨースケみたいな年下のイケメンと結婚しちゃった女の宿命みたいなモノかもしれないし・・。

本当はさあ、相手がツキちゃんじゃなくてホツとしているの。

今は、ヨースケの「僕は君や子供達と幸せになりたい！！」という言葉信じて生きていくしかないじゃん。

でもさあ、正直言つてヨースケの土下座には驚かされちゃったわよ！

普通の人よりプライドの高いヨースケが土下座するんだもんね・・。それも、家の中じゃなくて玄関の外にまで出てするなんてさあ・・。

玄関の外って言ったってマンションの廊下だけど、いつ誰が通るか分からないじゃない？

そいうリスクを負ってまで土下座してくれたって思うと、ちょっと感動しちゃった。

私も、少しは愛されているのかなあ？・・なんてジーンと来て、嬉しくなっちゃったのも事実なんだよね。

でも、2回目は効き目は無いけどね。

これからは、私も手綱を引き締めていかなくちゃいけないって事よ。でもさあ、幼稚園の送り迎えに、お弁当作り・・・大変になるじゃない？

おまけに一人増えちゃう訳だしさあ・・・。

子供が一人増えると、どうしてもそっちに目が行っちゃうのよねえ・

・3時間毎のミルクにオシメ・・・。

だからと言って、そうそう頻繁に探偵なんて雇っていられないしね。そうだ！！・・・いつその事、ツキちゃんに見張っていて貰おうかしら？・・・世話好きでお節介な小姑が居たら変な虫も付きにくいんじゃない？

きゃー・・・案外名案かもおー

ねえねえ、どう思う？

<3>色男の純情・・・？？

「探偵を雇ったんだからね！！証拠もそろっているのよ！！」って真紀子に問いつめられた時は、正直焦った。

もう少しで本当の事を白状するところだった。

でも、探偵が、ほんの小遣い稼ぎ程度にやっているだけのくぐうたらオヤジ>だったから良かったよ。

本当に19のキャバ嬢と浮気をしていたのかって？・・・そんなの、あるわけねえじゃん！！

俺が付き合っていたのはくツキ姉〓ツキねえ>一人だもん。

ツキ姉と誰かを天秤に掛けるなんて俺には出来ないから・・・。

じゃあ、キャバ嬢が相手って、どういう事なのかって？

新宿2丁目のはずれにくビリジアン>っていうキャバクラなんだけど・・・バンド時代のダチがマネージャーとして働いているんだよね。そいつは純粋な日本人なんだけど、どこから見ても東南アジア系にしか見えないっていうヤツなんだ。

ちゃんとした所に就職したかったらしいんだけど、バンド活動にのめり込んで高校を中退したから世間的な最終学歴は中卒扱い。

丈治と書いてジョージと読む本名も災いしたんだろうね・・ルックスと名前が変な想像を掻き立てるらしく色んな職を転々として、結局、キャバクラのマネージャーに落ち着いたんだ。

そのジョージが、この業界は競争が激しくて売り上げ売り上げて追いまくられて大変だって、会う度にこぼすもんだから「俺に出来る事があつたら手伝うよ」なんて余計な事を言っちゃったのさ。

そうしたらジョージのヤツが真に受けちゃってね、シヨ一の演出を手伝ってくれないかって・・。

俺もさあ、そういうのクライじや無いから、つい二つ返事で「オツケ」しちゃった訳よ。

ステージとかライトとか・・俺・・そういうの好きなんだよね・・水が合うって言うのかな？

初めて店に行った時はチンケなステージにばかりしたんだけど、オーナーが物わकारの良いオバサンでさあ・・俺が考えたイメージに合わせて少し手を入れてくれる事になっちゃった訳よ。

そうしたら俺も俄然スイッチが入っちゃってさあ・・俺自身がステージに立ちたいくらい興奮しちゃったのよ・・分かるだろ？

光と音とダンス・・キラキラしたものに囲まれて曲を選んだり、振り付けを考えたり、衣装や照明の事を考えるのは、なんだか昔に戻ったみたいでメチャクチャ楽しくてね。

それに、本当を言うと俺はバンド辞めたくなかったから、こういうのにすごく未練があつた訳よ。

メンバーは素人に毛が生えた程度の女の子達だったけど、皆、案外真面目に練習に取り組んでくれる良い子達ばかりでさあ・・。

最近の子は自分をキレイに見せる事が上手だし、ダンスとかの覚えも早いんだよ。

ジョージに言わせると「ヨースケ・マジックで女心は思いのまま」なんだってさ。

そう言われると、悪い気はしないだろう？

豚もおだてりや木に登る・・じゃないけれど、俺はおだてられて頑張っちゃったって訳よ。

そういう理由で俺は夜な夜なキャバクラに入り浸っていたんだけど、なんか都合良くカモフラージュになっちゃったみたいなんだよね。

でもさ・・本当の事を言うと、あの夜、真紀子に引導を渡された時点で俺の中では覚悟が出来ていたんだ。

ツキ姉が決心してくれたら、俺はいつでも全部捨てるつもりだった・

・真紀子の事も・・子供の事も。

親や兄弟に絶縁されて、テルキとの友情が絶たれたとしても構わないと思っていた。

仕事も何も全部放り出して、何処か遠くの町でツキ姉と二人で出直すのもいいかなあ・・なんてマジに考えていたんだよね。

あの夜はさ、そのつもりでツキ姉の家に行ったのに・・。

まさか、ツキ姉があんなにうるたえるとは思っていなかったよ。

軽くショツクだったな・・だってさあ、俺は真紀子に負けたようなもんだもん。

俺にとつてのツキ姉はく掛け替えのない特別な人>だったんだけど、ツキ姉にとつての俺はそうじゃなかったらしいや。

まさか、女同士の友情に負けるとは思わなかったぜ。

懂れて・・懂れ続けて・・やっと手に入れたと思っていたのにさ・・。

今だから言うけど、好きで好きで仕方ないのに、どうしてもツキ姉が振り向いてくれなかったから、ツキ姉の気を引く為に俺は真紀子に手を出したんだ。

浅はかだったよなあ。

あの時は、子供が出来るなんて考えていなかったからね。

それが仇になって、今、こういう状況にある訳だ。

あの時と違って、今回はツキ姉も同じ気持ちでいてくれるものばかり思ってたのに・・・。

何がヨースケ・マジックだよ・・・女心は思いのままだった？・・・一番肝心な相手に効かない魔法なんてさあ意味無いじゃん！！

だけど、そこで取り乱したりするのは俺の美学に反するからね。

俺は黙ってツキ姉の事を抱きしめた。

ただ・・・黙って・・・ギョーって・・・。

泣きたかったのはさあ・・・俺の方なんだか・・・ツキ姉・・・分かってるのかよ？！

仕方がないから、戻るつもりじゃなかった家に帰って真紀子に土下座してみた。

そうしたら、思い掛けないくらいの効果を発揮しちゃって、何もかもが上手くまとまっちゃった・・・という訳ヨ。

ホント・・・俺自身が狐につままれた気分なんだからね。

真紀子ってイイ性格してるのよ・・・良く言えばポジティブ・シンキングなんだけど、何でも自分に都合イイように解釈するんだ。

だから結婚する羽目になっちゃったんだけどさあ・・・。

今回は、真紀子の自分本位な解釈に救われたって事かな？

結局、俺は真紀子と一緒に子供達を育てていくしかないんだよね。

まあ、真紀子の事はクライじやないし、真由の事は可愛いと思ってる。

それにさあ、仲直りのフリをしたら、想定外の２人目が出来ちゃったしなあ。

不甲斐ないけど、男としての責任は取らなくちゃイケナイし・・・。

こんなに、こんなに想っているのにさあ・・・結局、ツキ姉の事をただ見守っていく事しか俺には出来ないんだね。切ねえよな・・・い

くら親友でもテルキには絶対言えねえし・・・辛いぜ！！

畜生！！畜生！！畜生おゝ！！

俺の人生の中で最大の過ちは、ツキ姉の手をちゃんと握りもせずに離しちまった事かもしれないな・・・。

俺は、あん時のツキ姉の温もりを絶対に忘れないから・・・。

絶対、一生忘れない。

たとえ一緒に居られなくても、俺にとってツキ姉は特別な女性なんだからさ・・・。

< 4 > ツキ子が月に吠える！！

電話を切った後、膝の力が抜けちゃった。

きつと、こういうのを脱力感にも似た安堵感って言うのよね、ホッと胸を撫で下ろしたっていう感じかな。

ああ、これで父さんや母さんに叱られなくて済むよ。

テルキには文句を言われなくて済んだし、美保や、千里や、香織には下手な言い訳をしなくても良いし・・・。

皆とは今まで通りの関係が続ける事が出来るんだあ・・・良かった良かった。

明日も、明後日も、今まで通りの生活が出来るんだよね？！

これで良かったんだよね？

本当にそうなの？・・・本当に今まで通りなのかな？

何もかもが妙な具合にうまく治まってしまったようだけれど、何かが足りない気がするんですけど・・・。

目に映る世界、自分の部屋、生活、家族、友人・・・何も変わらずに昨日と同じ明日を迎えられる事になった筈なんだけれど、何だかちつとも嬉しくないよ。

何かが変。

だって・・・涙が止まらないモン。

まるで大きな氷の塊を抱いているみたいだよ。

お腹も、肩も、背中も、足も・・・指の先の先まで、体中が冷え切つて、ブルブルガタガタふるえが止まらないの。

それに、胃の辺りには大きな穴がポツカリ空いちゃったみたい。

風がスースー通り抜けていくよ。

アタシ・・・何か忘れてるんじゃない？

すごく大事な事・・・何かとっても大きくて、かけがえのない大切なモノ？ 事？ 人？

アタシの一番大事なモノって何だったの？

家族？・・・友達？・・・生活？・・・仕事？

ううん、違う・・・そんなじゃない。

本当は、そんなのどうでもイイ！！

そんなの、全部無くなつたって良かった。

アタシにとつての宝物・・・たった一つの温もりだったのに・・・アタシは自分で捨ててしまったんだよね。

そう、ヨースケ。

ヨースケを失ってしまったから涙が止まらないの。

ヨースケを失ったなんて、恐くて、悲しくて、辛くて、切ないよ。

明日から？ううん、今の今から、さっきあの電話を切った瞬間から、ヨースケはアタシの世界から消えちゃった。

アタシ、今まで気付いてなかったよ・・・ヨースケの事をこんなに好きだったなんてさ・・・。

父さんも、母さんも、テルキも、美保も、千里も、香織も、それに真紀子も要らない！！

アタシの人生にはヨースケだけ居れば良かった。

そんな事も分からなかったなんて、アタシって、なんてバカなんだろう・・・阿呆で、愚かで、どうしようもないよ！

それにさあ、よく考えたら、今まで通りなんてあり得ないよね。そうだよ、真紀子の目なんて絶対に正面から見れないモン。

後ろめたくて、恥ずかしくて、申し訳なくて・・・ううん、それだけじゃないよね・・・きつと、たぶん、悔しくって、哀しくって、アタシは真紀子に嫉妬する。

そう、間違いなく嫉妬する。

ヨースケとの幸せな家庭生活なんかを見せつけられたら、アタシが嫉妬しない訳がないもの。

だって、真紀子の隣でヨースケが幸せそうに笑ったりするのを落ちて着いて見ていられる訳ないでしょう？

イヤだよ、絶対そんなの見たくない。

今までのアタシはね、真紀子が幸せそうにしているのを見ながら、ヨースケの唇の感触を思い描く事が出来たのよ。

考えてみるとヒドイ話だけどね。

アタシは、ずっとく親友>のフリをしながら真紀子を騙し続けていたんだモン。

真紀子は何も悪くないのにさ・・・。

アタシって嫌な女だったんだねえ。

でも、これからのアタシはヨースケの指にさえ触れる事は出来ないのよ。

淋しい女になったって訳。

身から出たサビ、自分で蒔いた種なんだけど、刈り取るのは難しいね。

これから先、どうやって生きていけばいいのかな？

アタシは・・・どうすればいいの？

父さんや母さんに嘘を突き通して、テルキを騙して、美保や千里や

香織とも一生く本音の話くなんか出来ない状態で生きていけるのかな？

でもさ、今更、真紀子に謝ったってどうしようもないじゃない？

何も知らない真紀子をく今の生活くから引きずり降ろす事になるだけで、何も元には戻らないし・・。

元々、アタシは、もう何年も父さんや母さんに嘘を突き、テルキを騙し、美保や千里や香織とはく本音の話くなんかしないで生きてきた訳よ。

なんて悪い娘で、酷い姉で、不誠実な友人だったんだろっ。

変わったのは、今まではヨースケが居たけど、これからは居ないっていう事だけ。

私が悪い娘で、酷い姉で、不誠実な友人である事には変わらないね。

こうやってアタシはいつも逃げてきたのさ。

何でも人のせいにして、自分が傷付かないように傷付かないようにとソレばかり考えて生きてきた。

そんな風だったから、きつと罰が当たったんだね。

結局、ヨースケの気持ちまで踏みにじっちゃったんだよね。

ヨースケに何て言えば良いんだろっ？

何か言える訳無いね。

謝って済む事じゃないもの。

本当に・・本当に・・好きで、好きで、たまらなかったのに・・もう、そういう正直な気持ちさえも伝えられない。

人からどう見られるのか、何て言われるのか・・なんて、どうでもイイ事ばかり気にして生きてきた。

年下の彼氏なんて・・ましてや弟の同級生で、しかも親友なんて格好悪いから・・なんてバカげた事を気にしちゃって、ヨースケが差し出してくれた手を握り返す事が出来なかった。

本当は、目をつぶっていたってヨースケの姿が見えるくらい、気になって、気になって仕方がなかったのにさ。

あの時、アタシが自分の気持ちに正直に向き合っていたら、こんな事にはならなかったんだよ。

ヨースケに真紀子や子供を捨てさせる訳にはいかなかった・・なんて言うのも亭の良い言い訳。

アタシ流のキレイ事。

臆病者のアタシは、後ろ指を指されるのが恐かっただけ。

真紀子の勘違いで上手くスルーしたって思っていたけど、そんなのは嘘っぱちだね。

結局、アタシの手の中には何にも残っていないもの。

ホント・・アタシには何にも無いや・・スツカラカンの空っぽ。

こんな筈じゃ無かったのに・・気が付くと、暗い夜空にポツカリと浮かぶ歪な月に向かって、ツキ子は声にならない声で吼えていた。

ー完ー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3638g/>

溜息ツキ子の遠吠え

2011年1月8日20時04分発行